

## 沖縄復帰40年

5月15日は、今から40年前（1972年）、沖縄の施政権がアメリカから日本に返還された日です。

その日のことは、私も「沖縄が返ってくる」という思いで、気分が高揚したことを覚えています。

沖縄は、第二次世界大戦後の1951年に締結されたサンフランシスコ講和条約により、アメリカの施政権下に置かれることになりました。その結果、アメリカは、沖縄に行政機関として「琉球政府」を、立法機関として公選の議員で構成される「立法院」をそれぞれ設置するなど一定の自治を認めましたが、最終的な意志決定権を握ることになったのです。

その後、1950年には朝鮮戦争が、1960年にはベトナム戦争が起こるなど、東西冷戦を背景とした国際的な緊張の中に、沖縄は丸ごと巻き込まれていきます。つまり、沖縄は、その地勢的条件により、当時のソ連や中国、北朝鮮等の東側諸国に対峙する米軍の重要な軍事基地として、その存在感を高めていきます。

ベトナム戦争の際は、沖縄の基地から巨大なB52爆撃機がベトナムに向かって飛び立っていきました。あの爆音に晒され続けた沖縄県民の苦痛は如何ばかりだったのでしょうか。

アメリカは、施政権をもとに各地に基地や施設の建設を続け、県民の生活を圧迫しただけでなく、アメリカ軍兵士による悪質な事件や事故も後を絶たず、このため、県民は本土復帰を目指し運動を始め、1960年には沖縄県祖国復帰協議会が結成されるに至ります。

転機が訪れたのは、1969年の佐藤総理大臣・ニクソン大統領による首脳会談でした。

ニクソン大統領は、ベトナム戦争の終結が近いことなどから、日米安全保障条約の延長と引き換えに沖縄返還を約束したのです。

更に、1970年、沖縄県中部のコザ市（現沖縄市）で、アメリカ軍兵士による2件の交通事故を契機にコザ暴動が発生しました。常日頃の沖縄県民に対する不当な差別への怒りが表面化したものであり、アメリカ軍による統治が限界に来ていることを内外に知らしめることになりました。

そして、遂に1972年5月12日、沖縄は日本への復帰を果たすことになったのですが、それは、沖縄県民が本当に願い、期待したものでしょうか。

沖縄の日本への復帰は実現しましたが、課題は今なお多く残されています。その一番大きな問題は普天間基地など米軍基地の問題です。沖縄県には、米軍専用施設面積の内7割以上が集中しており、しかも、沖縄本島では米軍基地が約2割も占めています。

また、アメリカ兵による悪質な事件が度々引き起こされているだけでなく、問題を起こした米兵は日米地位協定によって守られていることは、沖縄県民のみならず、我々にとっても許容しがたい現実です。

ただ、国際情勢の現状に目をやれば、北朝鮮の動向や中国の膨張政策は、軍事的な戦略上沖縄の重要性をますます高めており、沖縄県から基地を無くすという県民の願いは果たされそうにありません。

こうした中、沖縄県民の負担を如何に軽減していくかは、沖縄県民の問題というより、国民の共通の課題と認識しなければなりません。何故なら、日本の平和は、沖縄県民の負担と犠牲の上に維持されてきた、といっても過言ではないからです。

最近行われた毎日新聞による世論調査の結果、沖縄県への米軍基地の集中については、沖縄県民の69%が不平等だと認識しているのに対して、全国の国民の中でそのように認識しているのは33%と、約半分に止まっています。

一方、国民の37%は現状をやむを得ないとしていますが、沖縄県民では22%となっています。国民の間での、米軍基地を巡るこうした意識の差は、決して小さな問題ではありません。

私の手元に1冊の本があります。それは、大田昌秀さんの編著になる「これが沖縄戦だ」というものですが、その中で、大田氏は「沖縄戦は、日本軍11万人が、米軍54万8千人に立ち向かい、その間に住民がはさまれた残酷極まりない戦闘であった。大本営は、沖縄を本土決戦の捨て石と考えた。(中略)住民の犠牲10余万人。将兵の戦死者数を上回り、当時の人口の3分の1に当る。まさに「醜さの極地」であった。」と述べています。

沖縄戦は、6月23日、沖縄守備軍首脳が自決し事実上終結していくこととなりますが、その直前の6月6日、大田実沖縄根拠地隊司令官から海軍次官宛てに一通の電文が打たれています。その中で彼は、沖縄全土が戦場となった中沖縄県民が如何に戦闘に巻き込まれ、悲惨な戦いを強いられたかを記すと共に、その末尾に「沖縄県民斯克戦ヘリ、県民二対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」と訴えています。今の沖縄を見て、現地司令官の最後の叫びは聞き届けられたといえるでしょうか。

私は沖縄県に3度訪問したことがありますが、あの紺碧の海は本当に素晴らしいものでした。しかし同時に、沖縄は戦中・戦後を通じ、沢山の悲劇を体験した島であることを、その沖縄の痛みを、私たちは決して忘れてはならないのだと思っています。(塾頭 吉田 洋一)